とが大切であろう。

もう一つ気をつけなくてはならないと思うことは、このように自由なあそびや、生活の中から経験し、得ていくことが多い、この「自然」では、幼児のみにまかせておくと、うっかりすると一方的になり易く、個人差が大きくなるということである。もちろん、幼稚園では個人の指導ということが大切なことではあるが、落ちこぼれの子のないように、教師は子どもを充分に誘導して、多面的に経験の場を（あそび）持たせるということが大切ではないかと思う。

昨年の一年間を三才児と共に楽しくあそび、家庭的な雰囲気で過ごせたことは、本当にうれしいことであった。

今考えると、とりたてて「自然」にとりくんだわけではなかったが、三才なりの過ごしかたはしてきたつもりである。

四才児と「自然」

富樫純子

子どもたちの日常の生活の中には、子どもたちが自然の中で、自然に親しみを持ち、自然に愛情をもって楽しんでいる、いきいきとした姿が見受けられる。

自然の指導をどうしたらよいかなど、自然だけの領域を取り上げて言うのは、無理であることは当然であるが、昨年受け持った四才児が一年間、自然に関係あることでは、どんな活動や経験をしたり、どんなようすであったかを取り出して、ふりかえり考えてみることにする。

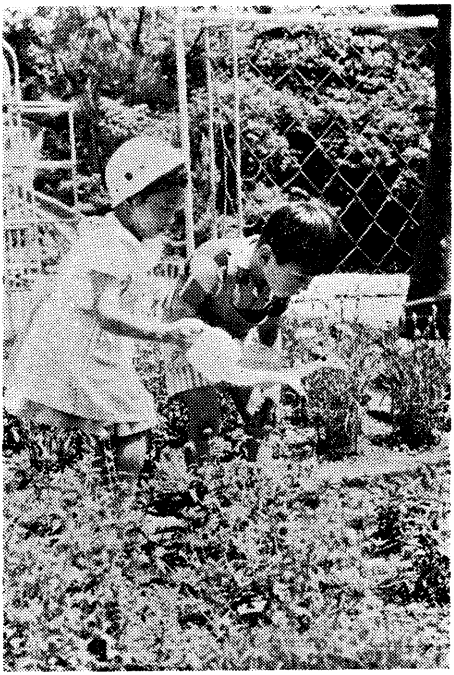
子どもたちは自然の中で生活して、自然の中で育っているので、自由に遊んでいる間に自然に属する遊びが非常に多い。このため自然では、自由遊びの中での指導が重要になってくる。自然に親しませ、自然への興味を深めるために、自然の中で子どもたちをのびのびと遊ばせるということを第一に考えた。次に自然の指導では、直接経験によることが望ましいことなので、環境が大切であるということは言うまでもない。環境と言えば当園は幸に、自然の山があり子どもたちは、毎日毎日この山をかけまわって遊んでいるわけであるから、この恩恵に浴するところが多いといわなければならない。

○　一学期

時期をおって思い出してみると、四月頃は入園した子どもたちも、昨年からの子どもたちも、園庭で春の日ざしをいっぱいあびて自由に遊んでいる。この自由遊びの時に、山の上のつみ草のできる所で、夢中で草をつんではクローバーを首飾りにしたり、はこべ・クローバーなどをつんでは、園庭に飼育しているモルモット・うさぎ・にわとり・小鳥などに草を食べさせて可愛がっていた。どうしても幼稚園では子どもたちが自由につんでよい、いわゆる雑草園というような草原があることが望ましいことになる。飼育しているモルモットなどでも、子どもたちが、草、にんじん、果物の皮など食べさせているので、えさをやりすぎて死ぬなどということがなければと、心配されるぐらい、変りばんこにえさを与えていた。幸にモルモットはえさをたくさん食べさせても、自分で必要な分だけ食べるので、幼稚園などでは飼育しやすいものの一つである。もう少しモルモットがなれて、子どもたちが自由に抱いて遊ぶということができるようになれば、もっともっと効果的であ

ると思う。この飼育動物たちは年間を通じて子どもたちの本当によい友だちであった。

えさをやっているうちに、にわとりはこの草が好き、うさぎはこれは食べないなど、子どもたちが自然の中に覚えていくようであった。花や葉っぱを使ってのままごと遊びや、つみ草をした草で遊ぶ、草角力といわれている草のひっぱりっこ遊びなどもよく行なわれていた。こういう時、幼児の特質として教師が仲間に入ると、子どもたちの興味は深まるし、遊びはより発展するようであった。



園庭の散歩の途中、小鳥小屋の前に立ち止って、インコ、十姉妹、鳩などをあきず眺めたり、話しかけたりしている子どもたちの姿を見るにつけ、いろいろの動物や小鳥などできるだけ飼育して環境を整えることが必要だと痛感した。花だんにきれいに咲いているチューリップを見ては、覚えたチューリップの歌をきかせている姿など見ると本当にほほえましかった。

また落ちているつつじの花やはくちょうげの花をつないで、首飾りや腕飾りつくりをするのもこの頃の遊びの一つであった。広い大学のグランドに行って、たんぽぽのわたげを一生懸命とばして、驚異の目を見はったりした経験も子どもたちには貴重なものであった。蝶々を追いかけまわして遊んだり、まる虫やてんとう虫のいそうな所を探して、庭の隅や、石をどかして見たり草をわけて探したりして遊んだりもした。

自然の指導はただ子どもたちの興味にだけまかせておいてよいというわけではなく、自然に対する興味や関心は個人差があるもので、子どもたちのようすをよく観察して適切な指導が必要である。自然への興味、関心の少ない子どももいれば、飼育動物をこわがって、近寄らない子どもなどもいるので、こういう子どもの指導には教師のたゆまない努力が大切である。

遠足という経験も欠かすことのできない活動の一つである。都会の中で育っている子どもたちに、自然のありのままの姿にふれることができて、広々とした所で一日思いきりのびのびと遊ばせるということを目的にして、春は日産厚生園へ遠足に行った。途中井の頭公園の池の鯉がえさを食べるのを見たり、樹木なども何年もたったのをびっくりして見たり、厚生園の花だんを見たり、まつぼっくり拾いを楽しんでしたりした。

五月の中頃を過ぎれば、子どもたちも幼稚園に対して安定感を持って遊んでいるので、ただ教師の計画をおしつけるのでなく、子ど

もたちの動きをよくみて、子どもたちの興味のありそうなもの、機会をつかまえて適当に教師の助言や助力をするように心掛けた。それと共に、子どものおどろきに共鳴するようにも努めた。

風車をつくってまわして遊び、どうしたらよくまわるか工夫したりした。金魚を見に行くということもこの頃の楽しいことの一つになった。花だんに水をやったり、草をとって世話をしたり、ありを見つけては、ありの巣を探したり、飛行機雲ができたのを眺めたり、雲を見ていろいろ想像したり、黒い入道雲の動くのを見て驚いたりもした。

○ 二学期

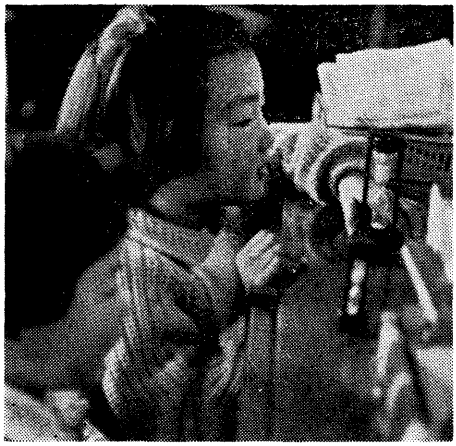
種子をとったり、虫を追いかけまわして遊ぶのが、興味の中心であった。広々とした大学グランドでの虫取り、山での虫探しと毎日のように子どもたちは、虫と遊んでいた。庭の砂利石の中から、白いきれいな小石だけを丹念に拾い集めて、ままごとの御飯にしている女児のグループもあった。

十月の初旬に、虫めがね・じしゃく・砂時計を自由に使って遊べるようにした。早速じしゃくを使って、つくものとつかないものを試してみたり、じしゃく同志つけてみたり、砂の中に入れて砂鉄のつくのをふしぎそうに眺めたり、砂鉄を集めたりした。虫めがねでいろいろのものを見て歩き、ピアノの鍵板の模様までも見たり、眼の所にやり、「あっ君の眼が大きく見えるよ」と驚きの声をあげたりしていた。砂時計は三分計と一分計の二つがあったので、二つを「よいどん」と競争させ「青かて－　ピンクかて」と応援したりして見ていた。何日かたって、こっちの砂時計が三回ひっくりかえし砂が落ちるのと、こっちの砂時計が一回と同じに砂の落ちるのはどうしてかな、というような疑問を持ったり、いろいろ試して見ていた。

グランドに行ったとき、かげふみ遊びをしたいと言い出し、どうしたら自分のかげをふまれないで逃げられるか、子どもなりに一生懸命工夫していたようだった。いのこづちが洋服や、靴下につくのがふしぎであり、おもしろいようであった。

秋の遠足は、いもほりで、最近のように恵まれすぎ、おいもは八百やさんにあるものとしか思っていない子どもたちには、本当によい経験であった。次から次へと土の中から出てくる大・小さまざまのおいも、つながっているおいもに歓声をあげ、刈り取った稲の干してある所を見たり、南京豆が土の中に埋っているのを見せてもらったりした。自分で掘ったおいもが、とてもおいしかったということは、子どもたちの話題になった。

クロッカス、ヒヤシンス、水仙などの水栽培を部屋で始めたのもこの頃であった。十月の末頃になると、幼稚園の山にいろいろなきれいな葉っぱが落ちて、集めることの好きな子どもたちは早速拾い集めて来る。集めた葉



っぱをのりではったり、模様に並べたり、まごとに使ったり、胸にさしたりしていた。大きい順にならべて「お父さんの葉っぱはこれ、お母さんはこれ、赤ちゃんの葉っぱはこれ」と言いながら分類している子どももあった。こういう時、教師のちょっとした励ましや助言で、遊びが楽しいものになった。

園外保育に植物園に出かけ、ふだんあまり見ない大小さまざまの木を見たり、猿やえびがにを見たり、広い所で遊んだり、まつぼっくりを拾ったりした。年長組が春咲きの球根を花だんに植えているのを見たりもした。

おもちゃやさんごっこをした時、こまをつくりこまをまわしてみて、この色とこの色と混じるとどんな色になるか調べたり、双眼鏡に色のセロファンをつけ、いろいろなものが赤く見えたり、青く見えたりするのをふしぎがって眺めたりした。

男児のグループは積木をつむには、どうしたら倒れないで高くつめるか、何日も何日もかかって工夫し、よく考えて下の方から順々にしっかり積んで、自分たちの背より高いビルディングをつくって遊んだりもした。

飛行機とばしも楽しい遊びの一つで、どの飛行機がよく飛ぶか、考えて折ったり、とばし方も考えている様子であった。

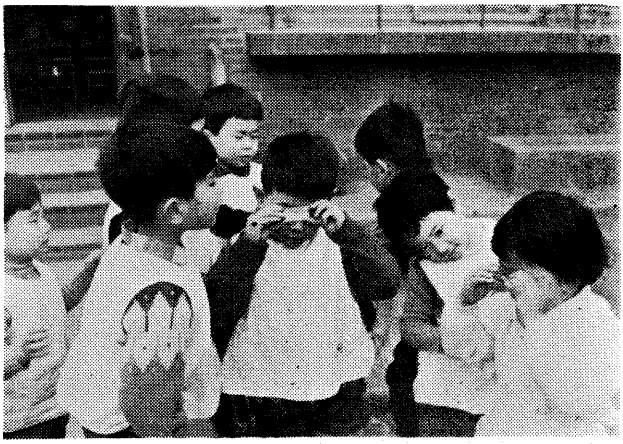
○ 三 学 期

室内遊びが多いこの頃、ブロック積木を使って遊ぶのに、なかなか立つものができないで、試めし試めし三日間ぐらいかかってみんなで考えたり相談したりして、立体的な立派なお城を作り上げることに成功したグループもあった。

霜や氷が子どもたちの興味の中心で、霜取りや氷探しの活動が盛であった。どういう所に霜ができるか探したり、霜を取って来ては日の当る所においてとけるのを見たりした。本当に自然は子どもたちに、次々といろいろの材料を提供してくれるので感謝しなくてはと思った。

プリズムをのぞいては、虹のようにきれいに見えるので喜んで使って遊んでいた。

水栽培のクロッカスやヒヤシンスの花の咲いた時は、子どもたちは驚き、喜んでいた。鉢植えの桜草やシクラメンにも、毎日のようにお水をやって世話をするのを楽しんでいた。霜よけの取れた花だんに、可愛らしいチューリップや水仙などの球根の芽が出ているのを見つけたり、園庭に草が出て来たので、はこべなどを取って来ては、動物たちに食べさせていた。



こうして一年間をふりかえってみると、子どもたちが、活発に自発的に活動するのに驚いたり、刺激されたりして、教師も共に学んで進んできた。これからも子どもの実態をつ

かんで、子どもの経験範囲を広く豊かにし、子どもの自然に対する愛情をすくすくと伸ばすように努め、教師は常に子どもと共に遊び、子どもの発見について共に驚き、年令相応の最も適した活動、ねらい、指導方法など研究していきたいと考えている。

五才児と「自然」

村石京子

五才児の級を受けもった一年をふりかえってみて、六領域の中で何をどのように扱って過ごしてきただろうか、特に「自然」の項としては何をやってきたかを考えてみる。今まで数多くくり返されているように、六領域といっても幼児の生活自体種々な要素が混然としており、一つ一つが分離独立した形のものでないことはいうまでもない。更にまた「自然」に関しては特に将来の理科の教科との連関はあることはもちろんだが、現在はそれを意識せずあそびを通してふれていきながら身近かにあるものを細く観察し、興味をもち、より深く知りたいという心をいだかせることが大切であると思いながら。

○一学期

桜の花が満開となりチューリップのつぼみもやわらかくふくらむこの時期には、園の庭には小さな蝶が花を尋ねてひらひらととんでいる。すでに一年または二年の園の生活経験をもつ五才児は、園の庭を我が家の庭と同じように親しみ探索している。目ざとく蝶を見つけた子どもたちは何とかとりたいものと苦心しているが、蝶も彼らよりも身軽くてなかなかとれない。子どもたちは道具の必要性を思いついた。「先生、ちょうちょうとりのあみない？」「明日　買って来てよ」と教師に頼んで庭であそびだしたが、やはり目の前でひらひらととぶ蝶への誘いは明日へのばすことができない。「あみつくるから布ちょうだい」と次の課程へ進む。「それじゃ手伝ってあげるわね」と教師と子どもたちと共同作業でありぎれと竹の棒で手製のあみができた。セロテープやセメダインを一ぱいつけてできたちょうちょとりのあみにいけどられた蝶は、早速これも手製のセロファン張りの箱に入れられた。やがて幾つかあみにかかると今度はとった蝶の名前を調べる仕事がはじまった。もんしろちょう・もんきちょう・しじみちょう・くろあげは、など知っているよと教えているもの、図鑑で調べるよというもの、それぞれの興味の深度と態度が知れるようなおもしろい場面が展開されるのであった。

五月下旬頃郊外へ遠足に行く。現地解散であり親子いっしょであるので、ちょっと足をのばしてという思いの人達が多摩川べりまで行ったらしい。翌日「昨日みんなでとったの」とめだかとかどじょうをびんに入れて持参した子どもがいるので部屋で飼うことにする。めだかは気持よさそうにすいすいと泳ぎまわっているけれど、どじょうの方は泥の中がこいしいらしく水の濁りの中へ身をかくすようにしてじっとしている。それをとるとき活躍したであろう子どもたちは「何を食べさせたらよいかな」とえさを心配している。それからひきつづいて、おたまじゃくし、かえるなどが日曜の翌日というと続々と登場するのであった。そして子どもたちは机のまわりでそれらを見つめながらうたうのであった。

「……どじょっこだのふなっこだの春になったと思うべな」「めだかの学校は川の中……」